
月の娘、太陽の王妃

如月 四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の娘、太陽の王妃

【Nコード】

N5694U

【作者名】

如月 四季

【あらすじ】

月光の民と呼ばれる種族の末裔であり、レティシアと呼ばれる娘は本名を隠しながら公爵家で働いていた。国に仕えるための行儀見習いという名目で公爵家で働き始めてもうすぐ一年。あと1週間で王城に上がるという日、娘の運命は変わった。大国の皇帝が言った一言によって……。私はただ、妹と二人穏やかに暮らせればそれ以上は望まないのに……。月光の民である自分にはそれさえも許されない。でもまさか、魔女と呼ばれるはずだった自分が王妃と呼ばれるようになるなんて！！

プロローグ（前書き）

初めての投稿、そして作品になります。誤字脱字等ありましたら教えてくだされば嬉しいです！では、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

なぜ私はここにいるのだろうか？と、いつも思う。いつもと言ってもここ1年のことだけれど。

いつまでここにいればいいのだろうか？とも思う。いつまでなんて分かりきっているけれど。

また、あの子に会えるだろうか？と常に想っている。もう一生会えないかもしれないけれど。

この屋敷に来て1年、必要最低限の礼儀作法やなにやらを学ばされ、もうすぐ私は王城に上がる。

名誉なんかじゃない。

一生を王城で、軟禁されながら過ごすのだ。

国のために魔法を使う魔女として。

国のための駒として。

国のためだけに。

でも、この国にいるかぎり妹に会える確立はゼロではないだろう。ゼロではないと・・・そう信じている。

いつの日かまた会えることを信じて、月に祈っている。

プロローグ（後書き）

み、短いですね（汗）まあプロローグなので、次はもう少し長くなります。

第1話（前書き）

主人公の公爵家での今まで、
です。

第1話

私の一日は朝日が昇る前から始まる。

このフェルマン公爵家に来てから一年、午前の二時間だけ礼儀作法や魔法の勉強に使う以外はすべてメイドとして屋敷で働いてきた。正直私を魔女にしたいのかメイドにしたいのか分からなくなるくらい朝から晩まで働いている。家政婦長や家令の罵声に耐えながら。私をこの屋敷に連れてきた公爵は私を嫌っているから、自然と公爵家の家人も辛く当たるのは当たり前といえば当たり前なのだけれど、自分に味方してくれる人が一人もないというのは、23歳になり、いわゆる大人と世間一般では言われる年齢になつた私でも、ちよつと堪える。

そもそも私は月光の民と呼ばれる、世界一の魔力と歴史を持つ種族の生き残りらしいのだ。

その証拠が夜色の真つ黒な髪と瞳。

世界中探しても黒を持つのは月光の民だけ。

その大きい力ゆえに恐れられ、迫害されし種族だ。

国力の無いこの国は私の魔力を使い何をするやら、他国の王侯貴族の見世物にするのか、軍事面で兵器として魔法を使わせるのか、そんなことは興味が無いし、どうせろくでもないから考えないようにしている。

とにかく、こんなメイドの真似事をし勉強という名の拷問を耐えしのぎ、屋敷の人間にほぼ総無視（一部はいじめ）をされながらもこんな場所でおとなしく従順にしているのは、ただただ妹のためであ

る。

迫害され一族で世界中を逃げ回り、いつのまにか姉妹二人だけになつてしまった。

私たちに帰る場所も逃げ場所もすでに無い。

「私がこの国の言いなりになれば妹には手を出さない」

そうこの国と契約し、もうすぐ一年。

このまま言いなりになっていれば、私はとりあえず食うに困ることはないし、妹は差別を受けながらも、生活の面倒は見るとの公爵の言葉通り、暴力などにも遭わず、生活にも困らないだろう。同じ国に、町にいれば、一瞬でも会う機会があるかもしれない。それだけを希望に、毎日を生きていた。

そう、この時はまだ知らなかったのだ。

まさか私が魔女ではなく王妃と呼ばれるようになるなんて。

第1話（後書き）

次から登場人物が一気に増えます！

第2話（前書き）

これで早々とストックも無くなりました・・・。

第2話

あと一週間で王城に上がるというある日、公爵の長女パトリシアは、何故か朝から興奮していた。

いつもは昼前まで寝ていて、私が起こしに行くまで絶対に起きないのに。

まあ、起こしてもすぐには起きず、必ず一回は意地悪をされるのだけれど。

「ちょっと聞きなさいよレティシア！今日の昼に誰が来ると思う？」

と、早朝にもかかわらず大声で言った。そして私が何かを話す前に、「陛下よ！！」と答えを披露してくれた。

それだけで、この早朝からのパトリシアの興奮具合と屋敷の慌ただしさに得心した。

私は一度も会った事はないが、この国の国王陛下はそれはそれは美形なんだそう。国王という国一の権力者な上に美形！まさにパトリシアの理想のタイプだ。むしろ彼女は王妃になることしか考えてないと言っても過言ではない。

そんな自分の理想のタイプ（むしろ彼女にとっては獲物だろうか）が自分の家来ると分かればそれは興奮もするだろう。今日一日はこの興奮が続くだろうと思うとゲンナリするが、機嫌が悪いよりましだ。

「そうですね。それはようございましたね。陛下はお嬢様に夢中で

「ごじますから。」

と持ち上げるようなことを言っておく。これは本当のことで、陛下はパトリシアに夢中だ。

権力も財力も顔も良い陛下だが、一つ残念なのは性格、と言われて
いる。本当に為政者かと思うくらい気弱で、自分の臣下はおるか、
民に一言言うだけでも何度舌を噛むのかというくらいらしい。だが
パトリシアにとっては自分の思うとおりに動かせるのでそれほどマ
イナスではないようだし、案外うまくいっているようである。

性格はまるで正反対の二人なのに不思議だ。

と、これらはすべて公爵家の使用人たちの噂を私がまとめた結論だ
が。

「あたりまえでしょ。わたくし私を誰だと思っているの!!!この国の王妃と
なる女よ!」

本当に今日は絶好調である。婚約したわけでもないのにパトリシア
が王妃になっている。しかし私も伊達に一年もこの公爵家でメイド
をしていたわけではない。

「そうですね。では王妃様とお呼びした方がよろしいでしょうか?」

と、返しておく。「機嫌が良い時間を少しでも長く」という一年間
で身に着けた教訓を生かすために。

「まあ、気が早いわね。そうね、呼ばせてあげても良いけれど、今日は陛下がいらっしゃるから止めておきなさい。」

「かしこまりました。」

どうやら今日は「王妃様ごっこ」はしないようである。
と、その時部屋にノックの音がした。部屋の主であるパトリシアの許しなく部屋に入ってきたのは、この屋敷の主である公爵その人であった。

「パトリシア！！陛下がお着きになったぞ！」

「まあ！こんな早朝に？」

「何でも火急の用事があるそうだ。一緒に来なさい。」

「火急の用事？何かしら？」

と、そこで何かを思いついたパトリシアは満面の笑みを浮かべた。

「きっと私に早く会いたくて火急の用事なんて言ってるんだわ！そんなに私のことを・・・！きつと今日、私はプロポーズされるのよ！」

なんておめでたい頭なんだろう・・・と思いつつこっそりため息を吐く。そして陛下がいるであろう応接間に向かう公爵親子の後ろについていく。私はパトリシア付きのメイドとなっているためパトリシアにどこまでも付いて行かねばならないからだ。ただ、私は屋敷からは出られないので屋敷の敷地内に限るが。

応接間に入るとはじめに目に入ってきたのはやわらかい金色の髪に水色の瞳の青年だった。「王子様」という言葉がとても似合う美形。その美形はパトリシアが入ってきたとたん立ち上がりもじもじし始めた。

「ぱ、ぱ、パトリシア・・・。ひ、久しぶりだね。あ、あ、朝早く・・・ごめんよ。」

「まあ陛下！！私こそご挨拶が遅れて申し訳ありませんわ。」

「そ！そ！そんなことありません！・・・あ、会えて、嬉しい・・・です。」

「私もですわ陛下！！」

どうやら件の国王陛下らしい。噂どおり残念な方だ、と二人の世界を公爵と傍観しているときだった。

「そろそろ私も彼女と話をしたいのだが。」

二人の世界に割って入る声がした。陛下の影になって見えなかったがもう一人お客様がいるらしい。そのお客様がソファから立ち上がった時。応接間の時間が止まった。

なぜなら、美形と言われている陛下など目に入らないくらいの美貌を携えた青年がいたからだ。

陛下と同じ金の髪に青い瞳、だが陛下のやわらかい色合いと違ってこちらは髪は黄金^{きん}で瞳は深い海の碧^{あお}に光の加減で金が散り、ラピスラズリのようなだった。さすがのパトリシアも目を見開いて固まっている。

そして、その青年はさらに驚くべきことを口にした。公爵でもパトリシアでも他の誰でもなく、私を見つめながら。唐突だが、と前置きした後には。

「私と結婚して欲しい。」と。

第2話（後書き）

次はゆっくりの更新になると思います。

第3話（前書き）

調子に乗って1日で書いてしまいました。急いで書いたので誤字脱字等ありましたら報告お願いします。

第3話

今、あの人はなんと言ったんだろう？
それが、今私の頭を占めているものだった。

「結婚して欲しい」

確かにそう言われた。
私の瞳を見つめながら。
いや、今も見つめられ続けている。
大きな魔力を有する私は、人の感情を読むのに長けている。それなのに、彼の人の感情は読めなかった。

『何を考えている？』

挑むように彼を睨んだときだった。

「まあ！私に求婚するなんて！！私を誰だと思っているのです！無礼でしてよ！」

パトリシアが空気を一掃した。どうやら自分に求婚したものと思っているようだった。

でも違う。彼は私を見ながら言ったのだ。それも、月光の民としての私に。

「でも、名前ぐらい聞いてあげても良くてよ。爵位さえ問題なければ第二候補ぐらいにはしてあげますわ。」

「第二候補」とは嫁ぎ先だろうか。何とも高慢なことだ。どうやら彼の人の美貌と男らしさに酔っているらしかった。

「これは失礼しました。私はガルシア帝国皇帝、カイル・デル・ガルシアと申します。あなたではなく、そちらの黒髪の女性を迎えに来ました。」

「!?!」

今度こそ時が止まった。この大陸、いや、世界最大の国、ガルシアの皇帝がなぜここに。こんな小国の公爵家に、迫害された月光の民を迎えに来たというのか。何のために。

頭の中は疑問ばかりでよく働かない。公爵もそうらしく、彼の皇帝を凝視したままだった。ガルシア皇帝を連れてきたわが国の陛下でさえ、空気を読んでか何も言い出せず、彼の皇帝の発言を待っている。だが、空気を読めない人間が一人だけいた。

「まあ！！ガルシア皇帝ですって！？陛下がお連れになっているのですから本人でしょう！？」

「まああああ！私がガルシアの王妃に！？」
わたくし

「何て素敵でしょう！カイル様なら私と並んでも……」
わたくし
「その女！」

勢いづいたパトリシアには皇帝の言葉の後半は聞こえなかったらしい。ガルシア皇帝の名前を口に乗せた時、公爵が止めようとしたがもう遅かった。

ガルシア皇帝が侮蔑の瞳でパトリシアを見ながら無理やり言葉を止めさせたのだ。そこに至って初めて、パトリシアは失敗したと悟った……。失敗ではすまされない失敗ではあったが。

「誰が私の名前を口にして良いと言った！」

もつともな言い分だった。公爵とわが国の陛下が必死に取り成している。

あたりまえだ、良く考えれば分かる。いや、良く考えなくてもガルシアとわが国の力の差は歴然だし、それ以前に他国の客人に対しての対応としては最悪である。普段はパトリシアを甘やかしている公爵だが顔を真っ赤にしてパトリシアを叱り、謝罪に必死だ。

私はその光景を、どこか遠くから見ていた。

「とにかく、約束どおりその黒髪の娘は私が貰い受ける。いいですね、レフィルド陛下。」

「あ、は、はい！！」

ガルシア皇帝はわが国の陛下に無理やり了解を取り。私の手を取った。

その時になって初めて、私に焦りが生じた。「どういうことですか陛下！」と公爵が陛下に詰め寄っている。ということは、公爵は知らなかったのだ。でも陛下は了承しているらしい。公爵に説明しようと思死な様子からそれが分かった。陛下が了承したことを公爵が今更、しかもガルシア皇帝相手に覆せる訳がない。それが余計、私の焦りを煽った。

「どういうことですか公爵！！契約を違^{たが}えるおつもりですか！！」

公爵に言い募っても仕方のないことだと分かっているが、他に話が通じそうな相手はいない。このままではガルシアに連れられていく！！妹のいるこの地から引き離される！！私が必死に抵抗している間にもガルシア皇帝にずるずると引きずられ、公爵邸では魔法の使

えない私はなす術もなく、公爵邸の玄関前に付けられた馬車に無理やり乗せられる。白地に金でガルシア帝国の紋章、王冠を戴き、翼を背にもつ獅子が描かれ、同じく金で豪華で繊細な模様が描かれた豪華な馬車だった。

「ガルシアまでは馬車でも1週間かかる。ガルシアに着いたらすぐに後宮に入ってもらおう。一月後には民への披露だ。それまでにお前を嫁る意味を説明する。」

「今この場で説明して下さい！！私はこの国を離れたくありません！！」

「今から話しても良いが、この馬車にはお前の魔法を無効化する結界が張ってあるし、歴代最高の魔力を持つと言われる俺から、どのみちお前は逃げられないぞ、月光の民の娘。」

その言葉に、ガルシア皇帝の本気と逃れられないことを知った私は俯き、唇を噛むしかなかった。走り出した馬車に、遠ざかる妹の気配を感じた気がした。

第3話（後書き）

頭の中の話を文章にするって難しいです！

第4話（前書き）

ガルシアの事情説明。何かうまく説明できていない気もするのですが……。それは作者の力不足です、はい（汗

精進します。

第4話

途中で休憩を挟みながら走り続け、今日の宿に着いたのは、あたりが薄闇に包まれてからだった。休憩と言っても、私を馬車から降ろすときは魔力を封じる魔法をかけられ、魔封具を着けた上でだつた。まるで犯罪者だ。いくら魔封具の見た目がアクセサリーといえども、無理やり魔力を封じられるのはやはり気持ちが良いものではない。

宿に着いた時も、休憩時と同じように魔法をかけられ魔封具を着けられた。言われるままに夕食を食べ、湯浴みをし、そしてやっと、皇帝との話し合いの場が設けられたのだ。私はそれまで、一言も喋っていなかった。早朝からの出来事に怒りたいところだが、実際は疲れていたのだ。馬車の旅は肉体的にも疲れるものだし、自身に起こった出来事を思い出すだけで精神的にまいってくる。だが、とりあえずガルシアの目的を明らかにしなければ、と私は気持ちを切り替えた。

「まず確認したい。お前は月光の民で間違いないな。」

最初に話し始めたのはやはりガルシア皇帝だつた。公爵邸ほど豪華ではないが、品が良い調度品からするに、この上級宿の部屋の中でも良い部屋なのだろう。その部屋のソファにテーブルを挟んで向かい合わせに座り、皇帝が言った。

それにしても、何を言い出すかと思えば今更な質問だつた。私の黒

髪黒目を見れば子供でも分かる。だから頷くことで答えた。

「ならばお前にやって欲しいことが三つある。もちろん、報酬は公爵と同じく妹の保護だ。」

どうやら残念な陛下は契約のことまでペラペラと喋ってしまったらしい。これでは私は心臓を掴まれたのと同じだ。言いなりになるしかない。断ったら妹がどうなるのか想像もつかない。むしろ契約が破棄になったも同然の今、妹はどこにいるのだろうか、無事なのか、そればかりが頭をまわる。だが話は始まったばかりだった、それもひとまず置いておかなければならない。

「一つ目は側室として後宮に上がること。」
「なぜですか？」

間髪いれずに聞き返した。長い間迫害してきた種族を後宮に入れるなど、ガルシアの民が受け入れるはずがない。だが、答えは意外なものだった。

「民が望んでいる。」

その答えにはさすがに目を見開く。

「お前は、最近強い魔力を持った魔術師が減っているのを知っているか？精霊の声を聞くところか、存在を感じられる魔術師や人も減っている。だからなのか、月光の民の力を民は望んでいる。強い魔力、精霊を感じるどころか見る事が出来る力をな。」

「勝手な！あなたたちは、その力が怖くて追い出されたくせに！」

「勝手なことは分かっている。だが、我がガルシア帝国は魔法大国だ。魔術の衰退は国力の低下を意味する。お前も知っているだろう？ガルシアがあるからこの大陸は平和を保っている。我が国が睨みを利かせていなければ、周辺諸国は100年前の大戦のようにすぐに戦を始めるだろう。そうすれば困るのはお前も同じのはずだ。戦が始まれば、お前たち月光の民は真っ先に兵器として利用されるぞ。」

「あなたの側室になったからといって、何も変わらない。」

「分かっている。民は月光の民の力を得たと安心はするだろうがそれだけだ。根本的な解決にはならない。だからお前には、なぜ強い魔力を持つものが減ったのか、精霊の声が聞こえないのは精霊が減ったからなのか、そういった原因を調べて欲しい。それが二つ目だ。」

側室になるのは表向きということだ。一時しのぎと言えど、確かに民は安心するのだろう。『自分たちは大丈夫だ』そう思いたいがゆえに。だが原因の究明は困難に思えた。だいたい、ハッキリとした原因があるなら、すぐに分かりそうなものだからだ。分からないということは、それだけ複雑な理由があるのだろう。私に出来るのか？ そう思った。

「三つ目は・・・純血の月光の民の娘を探すことだ。もし見つけたら、最初の二つは免除し、お前を自由にしてやる。月光の民が安心して暮らせる地を用意してやろう。」

息が止まるかと思った。「なぜ・・・」と呆然と呟かれた疑問に、皇帝は親切にも答えをくれた。

「純血の月光の民は月の色の髪と瞳。つまり銀色の髪と瞳だ。魔術

に詳しい者には周知の事実。どうせ妻に迎えるならより強い魔力を持つ純血がいいと思っている。」

「……私に、仲間を売れと？」

まさか純血の月光の民のことがそんなに知られているとは知らなかった。

だがそんなことよりも、悲しみて胸が潰れそうだ。

「売れと言っている訳ではない。王妃として丁重に迎えることを誓う。純血の娘を一人王妃に迎えられれば他の月光の民は純血だろうと自由に暮らすことを許す。ただ、王妃として迎えた者には王妃としての勤めは果たしてもらうことになるがな。」

ガルシア皇帝の話は、確かに月光の民としては魅力的なのだろう。王妃を立派に勤め上げれば、それだけ月光の民への周辺諸国の対応も良くなるだろうし、何より月光の民として暮らせる地をもらえるのだ。王妃としての勤めには、もちろん強い魔力を継ぐ子を産むことも入っているだろうが、王妃として誰か一人を差し出すことができれば、妹と二人、穏やかに暮らすのも夢ではなかったのかもしれない。

だが、遅すぎたのだ。

すべては後の祭り。

今更土地をもらったところで、暮らす月光の民は自分と妹しかない。

そう、もう二人しか残っていないのだ。

魔法や精霊を使って、何度も調べた。

何度やっても同じ、二人だけだった。たった二人。

もう、月光の民は自分と妹だけになってしまったのだ。

そして、月光の民として暮らす土地をもらうために必要な純血の娘は、

私しかないのだ。

第4話（後書き）

次は月光の民の事情を書こうかなと思っております。
そしてその次の回はガルシアに到着する予定（早

第5話（前書き）

何かあんまり月光の民の話になってない気が・・・（汗

第5話

そもそも月光の民は黒髪黒目だ。

ただ、純血の月光の民の髪と瞳は、大きな魔法を使ったとき銀色に変わる。

何がどうしてそうなったのかは分からないが、「純血の月光の民は銀髪銀目」という常識ができていたらしい。大きな魔法を使った後しばらくは黒色に戻らないので、きっと魔法を使った後の銀髪銀目を見た者がそんな噂をして広まったのかもしれないが、こちらには好都合だった。

知られるわけにはいかない。

王妃になって一生を王宮で過ごすなんてまっぴらごめんだ。王妃として王宮で暮らすことは、後宮に住む女たちにとっては憧れかもしれない、何しろ皇帝の一番近くで過ごすのだから。でも私はごめんだ。

後宮の住人になり、居もしない「純血の月光の民」を探し、魔力の低下や精霊の減少の原因を探る方が、外に出て色々な精霊にも会えるだろうし、そして妹にも・・・今はどこに居るのか分からないが魔法を使えば皇帝にバレずに会いに行きやすいかもしれない。安易だがそう思った。

私の妹は、実は半分しか血が繋がっていない。でも月光の民であった母の血を継ぎ、見た目は立派な月光の民だ。ただ・・・魔法はほとんど使えなかった。だが火をおこしたり、精霊に伝言を頼んだり魔法がほとんど使えなくてもそれほど苦労はしていなかった。

そもそも魔法とは、私たち自身が持っている魔力に精霊たちが持っている属性の力を乗せることで使えるものだ・・・少なくとも月光の民の魔法は。だからハーフであり魔力が少ない妹は小さい魔法しか使えないが、自分の魔力を最大限使った魔法が使える。だが大抵の魔術師は自分の魔力で精霊を使役することで魔法を使っている。色々な呪文を駆使し、自分の魔力を使い精霊を使役し、精霊に魔法を使わせる。術者は自分の魔力より高い精霊は使役することが出来ないで、必然的に自分の魔力より低い精霊を使役することになる。だが呪文で無理やり使役される精霊が本来の能力を発揮できるはずもなく、結果自分の魔力の3分の1程度の魔法しか使えないことになる。月光の民は自分の魔力を100%魔法に生かせるが、大抵の魔術師は生かせない。

話がそれたが、つまり、魔力の低下や精霊の減少の原因はその辺にあるのではないかと私は考えていた。だがそれも知らせるつもりはない。知らせたらどうだというのだ。魔術師は今更魔法の使い方を変えないだろうし、しかしだからといって魔法を使わないわけにはいかない。結果何の解決にもならないなら言わなくても同じだ。

そう、私は側室として皇帝のために働くことに決めた。
表面上だけでも平和に暮らせるのならいくらでも嘘をついてやる、
そう思った。

「分かりました。」

その声は、以外に部屋に響いた。

「側室として後宮に上がり、皇帝陛下のために原因と純血の君を探
しましょう。」

その言葉に、皇帝は少しだけ目元を和ませた。

「ただし、側室として上がったとしても、私に妾としての仕事をさせないでいてくれるのなら。」

「ただし」という言葉に一瞬緊張が走ったものの、そんな仕事は他にいくらでもやる女がいる、ということでした。承してもらえた。

そして目の前に一枚の羊皮紙が差し出される。製紙産業は飛躍的進歩を遂げている、そんな時代に羊皮紙を使うとは……正式な契約ということか。どこかの残念な陛下の国とは大違いである。前は形だけだった。

ガルシア皇帝が署名をし、皇帝の印章を捺印した。

次は私の番だ。

皇帝はずっと私を見ていた。碧い瞳に散っている金は太陽の光を思わせる。懐かしい、温かい光だ。

「お前は、私を守ると約束しよう。」

視線を私と合わせたまま、皇帝が言った。私が居なくなっても妹は役に立たないと知っているからの言葉なのか。真意は測りかねた。

だが、人を信じさせる何かがあった。

多少粗野なところはあるが、やはり大国の皇帝というだけある。

「では私は、あなたを守ることを約束しましょう。」

「レティシア」と公爵邸で呼ばれていた名を契約書に記しながら言った。そう、あなたが居なくなってしまったら、今度こそ私たちはどうなるか分からない。だからこそ私が、あなたを守る。

かつて月光の民で歴代最高の魔力を誇ると言われた、私の真名にかけて。

そして契約は結ばれた。

純血の娘の真名は明かされぬまま…………。ガルシア皇帝に、
7人目の側室が誕生したのだ。
1

第5話（後書き）

次はガルシア皇帝視点にしようかガルシアに着いてからにしようか迷ってます。

閑話（前書き）

ガルシア皇帝視点でお送りします。

閑話

正直、期待はしていなかった。

月光の民を望む国民や魔術師は数多くいたが、魔法が得意な種族だけあって、結界でも張っているのかほとんど目撃情報はなく、魔法を使っただけでもほとんど成果はなかった。だから小国の公爵の元に居るといふ噂を聞いた時も、ただの噂だと思ったのだ。

しかし噂の信憑性が上がり真実を確かめに小国へ赴くと、噂は真実だった。

しかも月光の民の娘はあと一週間で王宮に上がるという。公の地位を得てしまうと厄介だ。おいそれと側室に出来なくなってしまう。だがまだ間に合う。小国の王といえど、もともと気が弱い王を説き伏せるのは簡単だったし、すぐ娘を預かっているという公爵家へ行くことになった。公爵の娘であるパトリシアに会えるのがよほど嬉しいのか、やれパトリシアは美しいだのパトリシアは素晴らしいだ

の自慢話をされたが興味はなかった。俺が迎えに行くのはパトリシアではないし、美しかろうが美しくなろうが娶ることはすでにガルスシアでは決定事項だからだ。

公爵邸で初めて月光の民の娘を見たとき、目を見張った。本当に、黒髪黒目だった。

だが公爵令嬢とこの国の王の話を遮ったとき、月光の民の娘と目が合った、娘の方も目を見張ってこちらを見ていた。俺は自分の容姿がどういうものか良く分かっている。初めて会った者が大抵こういう反応をすることも分かっていた。

娘が固まっているのを見ながら、俺のほうは落ち着きを取り戻していた。改めて見てみると、娘の方もきれいな容姿をしていた。月光の民にだけ許された闇色の髪と瞳に先に目がいつてしまうが、メイドの制服を着ていても溢れ出るその神秘的な美しさは、確かに人の目を引き付けるものだった。ただ、少し痩せすぎなのがさらに目を

引いたのも事実だった。良く見るとサイズの合っていないメイドの制服から見える手は荒れているし、腕には痣も見える、黒い大きな目は隈で縁取られていて、顔色は白を通り越して青白い。いったいどんな扱いを受けていたのか、その姿を見ただけで分かるというものだ。

娘と同じく目を見張ったまま固まっていたパトリシアが、何を勘違いしたのかキンキン高い声で話しているのも相まってイラついてくる。月光の民の娘とこの国の契約については聞いていたが、衣食住を保障するという言葉は飾りかと詰め寄りたいのを我慢する。この娘が王宮に上がり、この国のために使うであろう魔法の対価になっているとはとても思えない。

だいたい、この手の女は嫌いだった。『甘やかされて育った礼儀と世間を知らないお嬢様』まさにそんな感じだ。自身の後宮の女も似たり寄ったりだったが、良くこの国の王はこんな女を・・・などと不敬なことを考えていたが、小国とはいえ相手は公爵令嬢だ、理性を総動員して挨拶をし、月光の民を迎えにきたことも改めて伝えた。

が、何ておめでたい頭なんだ。

人の話は聞いていないし、自分がガルシアの王妃になれると勘違いし一人で盛り上がっている。誰が王妃と言った！そもそも俺が迎えに来たのは貴様じゃない！その怒りは、自身の名前を呼ばれたとき爆発した。自分では気が長い方だと思っていたが、そうでもないのかもしれない。

思えば、最後に自分の名前を呼んだのは誰だったのか。信頼できる側近や幼馴染も、即位し皇帝となった今では名前では呼ばない。大切な人にこそ呼んで欲しいのに、己の名前を呼ぶのはいつも厚かましい女や取り入るうとする者たちだけだ。

だから俺は自分の名前を呼ばれるのが嫌いなんだ！

怒りのままに月光の民を攫うように公爵邸から連れ出した。娘は妹がどうか言っていたがそちらはもう別に手配済みだ。だがそれを知らせる前に、契約を結ばなければならない。

ガルシアには、月光の民が必要なことから。

結果から言えば、比較的スムーズに契約までこぎつけた。月光の民の娘には半ば脅しのようになってしまったが、決して悪い条件でないことは良く考えればすぐ分かる。

契約の要の妹も、もうじきガルシアの騎士たちが保護し、少し遅れるが帝国まで連れてくるだろう。その後は田舎の教会にでも移ってもらい、ひっそりと暮らしてもらうつもりだ。

すべてはこちらの思い通りに進んでいる。

あとは魔力うんぬん等の原因と純血の月光の民の娘さえ見つければこの娘も開放してやれるし、月光の民の村を作ってやれば妹共々幸せに暮らせるだろう。

そう思っていた。

だが、娘の暗い瞳が気になった。契約の羊皮紙に署名をしながら瞳を合わせた時、ランプの明かりに煌めく瞳には、さまざまな感情が表れていた。

悲しみ、憎しみ、憂い、その他色々な暗い感情。

こんなに暗く、複雑な色の瞳を見たことはない。皇帝として多くの者と係わっているうちに、瞳から感情を読むのが得意になっていたが、読みきれない感情だった。

ただ、『この娘は一人だ』と強く感じた。

幼い頃から紆余曲折はあったものの、幼馴染や側近といった周りの者に恵まれていた俺は、一人だと感じたことはほとんどない。

一人だと感じたことがほとんどないからなのか、そう感じたのだ。

そして瞳の一番奥には、絶望が見えた気がした。

だからいつの間にか口にしていた。

「お前は、私を守ると約束しよう」と。

今日から娘は、ガルシアの民になるのだ。
俺の民は、俺が守る。

そう、この時は本当にそう思っていたのだ。

だが今思えばこの頃から、この闇色の瞳に俺は深く囚われていた。

女として愛するようになるとは、思ってもみなかったのだ。

閑話（後書き）

皇帝の一人称は俺でした！！

私にしようか迷ったけど紛らわしいかなと思ひまして。そして私は男らしい男の人が好きなので！（って私の好みは関係ないんですけど・・・）

次は場面が飛んでガルシアの後宮に入ってからの話になると思います。

第6話（前書き）

またちょっとレティシア視点かも・・・。

第6話

ガルシア皇帝の後宮にてレティシアに与えられた部屋は、後宮の入り口に程近い身分の低い側室が住まう場所だった。といっても、居間と寝室、浴室や侍女部屋があつて何不自由なく過ごせるし、何より広く豪華な部屋だった。

どうやらこの部屋には女官や侍女数人と住むらしい。「らしい」とはそう皇帝から説明されただけだからだ。どうやら皇帝陛下の側近である宰相様が連れてきてくれるらしい。何の後ろ盾もない私のために、陛下はエンフエライエル公爵という方に後見を頼んだそうだ。公爵様はとても頭の切れる方で、現役を退かれた今も王宮や政治に対する影響力は大きいとか。そんな公爵様の一人息子が宰相であるノアティード様らしい。しかも何と恐れ多いことに、女官と侍女は宰相様が手配してくださったとか。いくら多くの国民が月光の民を望んでいるといっても、納得していない者はいるらしい。その者たちを牽制する意味でも大事な事だと言っていた。

昼過ぎにガルシアに着き、後宮にあるこの部屋まで皇帝自らが案内してくれたのは良いが、いつの間にかソファーに座って寛いでいる。色々な説明をしてくれたのは嬉しいが、この部屋に来るまでにそろそろと引き連れていた近衛の騎士達は部屋の外で待機しているし、話が終わった今、部屋は沈黙が支配していた。

コンコン

そろそろ沈黙が限界を迎える頃、部屋の戸が鳴った。皇帝が入室を許すと1人の男性と3人の女性が入ってきた。4人は陛下が座るソファアの横に立った。

「紹介しよう。宰相のノアとお前の女官と侍女だ。」

陛下の紹介をかわぎりに自己紹介が始まった。

「初めてお目にかかります。宰相のノアティード・ド・アレヴァンティと申します。伯爵位を賜っております。こちらの者達はみな私の家のものです。月光の君の側には信頼できる者と思い、選んだ者たちでございます。どうぞ使ってくださいませ。」

宰相様は女性3人を目で示しながらさらに紹介した。宰相様はブラウンの髪に緑の瞳と良く見かける色彩だったが、細い銀フレームの眼鏡をかけた理知的な方だった。

「初めまして月光の君様。私は本日より女官としてお仕えさせていただきます。エリア・ル・フラレンと申します。」

「同じく、侍女としてお仕えさせていただきます。リリ・ラ・ベルと申します。」

「リリと双子のルル・ラ・ベルと申します。同じく侍女としてお仕えさせていただきます。」

エリアは群青色の髪と濃紺色の瞳の優しげな女性だった。女性としては身長は高めだが、そんなことが気にならないくらい美人だ。リリとルルはまったく同じ顔で、薄い水色の髪と濃い紫の瞳の可愛いらしい少女達だった。3人とも笑顔で私に笑いかけている。

それが、何故か分からなかった。

笑顔を向けられたことなんてほとんどなかったから。

だから怖い。

優しくしないで

優しくされたら、挫けてしまいそうになるから。

第6話（後書き）

やっぱり短くなってしまった。

第7話（前書き）

何かもう誰視点なんだか分からなくなっ
てまいりました（涙

第7話

後宮での暮らしは私には退屈でしかなかった。それに……

「妹がいない!？」

それは、後宮に来てから一週間ほど経った頃だった。その間私はといえば『まだ来たばかりなのだからあまり動くのは良くない』とのこと、毎日毎日部屋で贅沢な格好をし、贅沢なご飯を食べては寝るを繰り返していた。そして私付きであるエリアとリリ、ララとは当たり障りのない関係を築いていた。何故か3人が3人とも友好的なのが気になるところだが、私が今一番気にしているのはそんなことじゃない。そんな贅沢なことばかりしていたからこんなことになったのだ。

妹がいなくなるなんて

「どういことですか！？妹を保護してくれるのではないのですか！？」

「そのはずだった。お前を迎えに行くと同時にお前の妹の元に騎士を向かわせたが、そこにお前の妹はいなかったそうだ。」

淡々と陛下が言う。一週間も後宮で暇を持て余していた私の元へ何の用があるのかと思っていたら……。思わずソファアから立ち上がったが眩暈を感じて座り直した。

「どこに行つたかは？」

「その心当たりをお前に聞きに來たのだ。騎士達は手がかりも掴めずに帰ってきた。これ以上探しようがない。」

私は頭を抱えなくなった。心当たりなんてある分けない。帰る場所も、思い出の場所も私達には無いからだ。ただ、考えなしにそんなことをする子ではないから、何か考えがあらうてのことだと思うが……。

それにしてもなぜ？

公爵邸に行く前、彼女の側にいるよう数人の精霊に頼んでおいたので滅多な事は起こらないとは分かっているが、行方が知れないというのがこんなに堪えるとは……。

「その様子では、心当たりは無さそうだな。今後捜索はさせるが、何か思い出したことがあれば言ってくれ。」

それだけ言つと陛下は部屋を出て行った。

陛下が出て行ったとたん、私の側に寄ってきたのは私付きの3人だった。

「レティシア様、お気を確かに。妹君はご無事でいらっしやいますわ。何と言っても月光の民の君なんですもの。」

「そうですね。すぐ見つかりますわ。」

「我が国の騎士達は優秀ですもの。きっと見つかりますわよ。」

エリアを筆頭にリリとララが慰めてくれるが、それが今の私の癪に障った。

「私の妹は月光の民のハーフなの。魔法がほとんど使えないのよ。精霊が側に居るとはいえ絶対なんて無いわ！！何故絶対何て言い切れるの！？」

妹と離れて一年余り、一度も会えなくても大丈夫だったのは精霊を

通してその存在を側に感じていたからだ。公爵邸にも魔法が使えない様結界が張ってあったりしたが、精霊の出入りまでは制限していなかった。それがこのガルシア帝国の王宮といたら、後宮を含め城全体に精霊の出入りが制限される結界まで張ってある。さらに目立ったことが出来ないこともあり、未だ精霊と接触出来ていなかった。その間にこんなことになっているなんて……。思わず感情的になって最後の方は叫ぶように言ってしまった。

後悔が胸を締め付けるが、大して気にした風もなくエリアは言った。

「私も月光の民の血を引いております。でも血を引いているといつても私は魔法は使えません。でも昔からいくらいじめられても、大怪我をしそうな大事故にあつても、何かに守られているように私は怪我という怪我をしたことはありません。」

『月光の民の血を引いている』その事実には私を見開いた。

そう、いないことはないのだ、現に私の母も普通の人間と想いを交わし妹が生まれたのだから。何代前かは分からないがエリアの祖先にも月光の民と想いを交わしたものがいたのだろう。そして月光の

民の血を引くと周囲に知られていてもここまで血を繋いできたのだ。

「私は、怪我をしなかったのは精霊様のおかげだと思っております。我が子爵家は月光の民の血を引くことを誇りに思い、月光の民と同じように精霊様を敬うようにと教えられ、季節の祭りや行事の折には精霊様に祈りを捧げていたからです。姿が見えなく、声が聞こえなくても、精霊様の気配は常に私達の周りにありましたから、すぐに分かったのです。私達は精霊に守られていると。」

「私達？」

私がそこで訝しげに聞き返すと、エリアはリリとララを見た。

「まさか！」

「はい。私とララも月光の民の血を引いております。エリア様と違って魔力は大きく魔法も使えますが。我が男爵家も、エリア様のご実家と同じく月光の民や精霊様を敬っております。そのおかげか公然と月光の民を敬っていると言っても、誰も怪我や暗殺等にあつたことはありません。皆老衰で、天寿を全うして亡くなったと聞いております。」

「月光の民と情を交わしたと、一時爵位も剥奪され生活にも苦勞したと聞きましたが、月光の民の力を望む声が出始めた頃に新たに爵位を賜りました。私達がこの城へ上がったのも、陛下の采配でございます。この先も苦勞するであろう月光の民の姫君に、少しでも近しい者を・・・と。」

知らなかった。他の民と想いを交わした月光の民がその先どうなっていたかなんて。

どうせ子孫もろとも迫害されるに決まっていると思っていた。魔力や魔術師の衰退というきっかけがあったものの、皆幸せに暮らしたのだろうか？だからこうやって、エリアやリリ、ララがいるのだろうか？皆が皆幸せだったかは分からないが、そうであればいいと思った。

「レティシア様、必ず妹君にはもう一度会えますわ。精霊様が守ってくださいます。私達の実家にも探させますので、どうか元気を出してくださいませ。」

そうか、彼女達は仲間だったのだ。血は薄くなり、月光の民とは呼べないほどになっても、心は月光の民だったのだ。だから彼女達は私に優しい。仲間に優しくしない仲間はいない。

「妹が見つからないかぎり、落ち込んだままだと思う。でも、こうして月光の民の血を引くあなた達に会えたことを嬉しく思う。月光の民の心を継ぐ者がいることを、嬉しく思う。ありがとう。」

気が付けば、涙がこぼれていた。
世界に二人だと思っていた。実際、月光の民と呼べるのは私と妹だけなのかもしれない。

でも、月光の民の心を継ぐ人がいたなんて……。血を引いていること以上に嬉しい。
世界に二人だけじゃない気がした。

「そんな、お礼を言うのは私達ですわ。もう月光の民の君には会えないかと思っておりますもの。精霊と心を交わし、自然を愛し、強大な魔力を誇る月光の民の君、レティシア様に会えたことは私達にとって最高の喜びですわ。ずっと、月光の民に憧れておりましたもの。」

エリアの言葉を受け、リリとララが頷く。

「私達は、いつでもレティシア様の味方ですわ。」

長い、長い後宮生活は、自分には辛いものになると思っていた。居もしない純血の月光の民を探し続け、ずっとこの後宮に居るのかと思っていた。

でも初めて、この三人と一緒になら耐えられると思った。

第7話（後書き）

徐々にキャラの気持ちを出していけたらと思います。

第8話（前書き）

続けて更新です！

第8話

レティシアの表情はガルシアの後宮に来た当初より柔らかくなっていた。

エリア、リリ、ララの存在はそれだけレティシアに大きな変化を与えた。

ただ、以前としてレティシアの妹の行方は知れなかった。

「妹の方はまだ見つからないのか？」

ガルシア皇帝カイルの執務室には宰相であるノアティードが搜索の報告に上がっていた。歴代皇帝の執務室だったそこは、豪華だが執務を執る場所ということでシックで落ち着いた雰囲気部屋だった。

「はい。レティシア様にも以前として心当たりはなく、フラーレン

子爵家やベル男爵家も総出で探していますが未だ見つかっておりません。」

ノアティードの報告に、執務室の中に沈黙が落ちた。

レティシアがガルシアに来てからもうすぐ一月。新しい側室である月光の民のお披露目はもうすぐだ。彼女は契約を守り後宮に居るというのに、自分は彼女の妹の居場所さえも分からない。契約を果たす以前の問題だ。

「あれはどうしている？」

「レティシア様はお披露目のための準備で忙しいかと。」

「そうか。」

女官や侍女とも打ち解けたと報告で聞いていた。元気であるならそれでいい。

「ただ・・・」

「なんだ。」

「少しずつですが、食欲が落ちているとエリアから報告が上がっています。もともとレティシア様はお育ちになった環境が環境だけに

食の細い方でしたが、もうすぐ妹君が行方不明になり一月ですから・
・。・」

「・・・・そうか。」

カイルにはそう返すしかなかった。自分に何もできないのは分かっている。それに、契約を何も果たせていないのに彼女にばかり契約を守らせている自分が卑怯に思えてならなかった。

その頃レティシアといえば、明日に迫ったお披露目の儀式のための最終確認をしていた。お披露目の儀式は王族が婚姻するときに王宮前の広場に面したバルコニーに姿を現し挨拶するものである。歴代皇帝の側室、とりわけ王妃を迎えるときは盛大なものになるが、今回はその比ではないと言われていた。民が王妃以上に望んでいた月光の民である。本来なら晴れ晴れしい儀式であるものの、その主役の1人であるレティシアの瞳は晴れなかった。

どんなに綺麗なドレスも、靴も、宝石たちも、心を慰めてはくれない。

エリア達がいてくれるので自分を保っていられるが、お披露目の衣装を選ぶときも上の空で、花嫁の色である白のドレスならどれでも良いと言いつつ人を困らせた。

食も日々細くなっている。

ガルシアの後宮に入り、規則正しく豪華な食事を取っていたレティシアは娘らしい曲線を取り戻しかけていたが、このままでは逆戻りだ。

一月も妹の行方が知れないとは……。

いつそ契約を破棄してしまおうかとも思ったが、ガルシア皇帝のあの瞳の輝きを信じたのは自分だ。あの人なら信じられると、心のどこかで思ったのだ。それにエリア達のことにも出来るなら裏切るようなまねはしたくない。

そしてレディシアの心が晴れないまま、お披露目の日を迎えたのである。

その日は、雲一つない快晴だった。

暖かい春の日差しが降り注ぐバルコニーに待ち望んでいた人物が現れたとき、広場に集まった民衆は歓喜した。花が舞い、賛辞が飛び交う。かつてないほどの人数の民衆に騎士達も大慌てである。その民衆の視線を浴びているカイルは、バルコニーから民衆に手を振っている。傍らに白いドレスを身に纏ったレティシアを連れて。

花嫁の衣装である白いドレスはレティシアの黒髪に良く映えた。レースやリボンのあしらわれた白いドレスからのぞく肌も白く美しい黒髪はアップにして白バラがさしてある。ただ、黒い神秘的な瞳だけは輝きを失ったように曇っていた。

レティシアの腰に左手を置き右手を振っていたカイルは、横目でレティシアを観察し不意に、笑えばさぞ美しいだろうと思った。

薄く化粧を施され白いドレスを着たレティシアは、もとの神秘的な美しさも相まって、陽光の下だがまさに月のような美しさだ。

ただ、表情がないことを除いては

それを、少し残念に思った。

だが次の瞬間、何かを見つけたように一瞬驚いたレティシアは、

晴れやかに微笑んだのだ。花が咲くように。
カイルの腕の中で。カイルではない誰かを見つめながら。

第8話（後書き）

次はあまりお待たせしないように頑張ります！！

第9話（前書き）

お、遅くなりまして・・・（汗

第9話

その笑顔に、カイルを含め集まった人々は、息を止めて見入っていた。

この一月、一度たりとも笑わなかったレティシアが微笑んだ。

自分のこの腕の中で、広場に居る誰かを見つめながら。

自分ではない誰かを見つめながら。

その誰かはすぐ見つかった。

皆レティシアの笑顔に見入っている中で、唯一レティシアと微笑み合っていたからだ。

レティシアと同じ黒い髪と黒い瞳の女だった。

『ねえさま』

そう女の唇が動いた。

『探していた妹か！！』

そう分かっててもすぐには動けない。まだお披露目は始まったばかりだ。

このバルコニーでの挨拶の後にはお披露目の宴があるし、後宮入りの儀式もある。

何より、まだ民衆の目がある。

気を取り直し、笑顔を無理やり貼り付け民衆に手を振り続けた。自分もレティシアの笑顔をもう一度見たいと思いながら……。

バルコニーから離れ、民衆の目が届かぬ所まで来ると、レティシアはカイルに詰め寄った。

「陛下！！民衆の中に妹がおります！」

「分かっている。すぐ近衛に迎えに行かせる。」

一瞬レティシアは何故カイルに妹が広場に居たことが分かったのか不思議そうにしていたが、結局言葉にすることはなく、おとなしく「お願いします。」という言葉を返してきた。

レティシアが妹を見つけたとき、彼女の笑顔にその場に居た人々の目が引き付けられていたことなど、彼女自身はまったく気が付いていなかったらしい。

『この分では、自分が笑顔だったことも気が付いていなさそうだ。』

そう苦笑しながら、宴に出るために衣装を変えるレティシアと別れ、近衛に指示を出し、自分も宴に出るための準備に向かった。

『まったく、女の仕度には何故こう時間がかかるんだ・・・』

そう心の中で毒付きながらカイルは大広間の王族専用控え室でレイシアを待っていた。

宴の主役であるレイシアはカイルと共に広間へ入場することとなっていた。広間には他の側室や貴族がすでに集まり、二人の入場を待っている。先に宴の準備のために部屋へと帰したはずなのに、レイシアの妹のことや宴のことに時間を取られた自分よりも遅いと

は……。妹の保護に失敗したことも相まって苛立ちはついていた。

そう、妹は結局見つからなかった。

月光の民の象徴である黒い髪と瞳なのだから、大勢の人が集まっている広場からでもすぐに見つけ出し、保護できると思っていた。が、帰ってきた近衛の騎士からは保護はおろか有益な情報さえ得られなかったという報告しか上がってこなかった。

『どうレティシアに言えば良いのか……。』

王族の控え室の中には立派なソファやテーブルがあり、すぐにお茶や軽食が取れるよう侍従や侍女もひかえていたが、カイルはイライラと部屋の中を歩き回っていた。

『だいたい、何故俺がこんなに必死になっている？彼女の妹がこの国に居るのは間違いないし他の街へ行く街道にも検問を配置した今、

この街からは出られないのだからこんなに焦る必要はないはずだ。
□

そう思うものの、何故か釈然としない。思考が検討違いの方向に向
いている気がしてならない。

埒が明かないことをぐるぐる考えていると、ノックの音が部屋に響
き、女官の声がレティシアの入室を告げた。

そこに居たのは、紅のドレスに身を包んだ、大輪の薔薇のようなレ
ティシアだった。

「遅くなり申し訳ありません。」

その姿に見入っていたカイルは、その言葉に意識を現実に戻した。
紅で統一され、何枚ものシフォンを重ねたドレスの裾は、まさに大
輪の薔薇を思わせ、白のドレスとは違った美しさを醸し出していた。

だが、礼儀的にカイルに侘びを言うレティシアに、広場で見せたよ
うな笑顔はなかった。
昨日まではそれが普通であったのに、カイルは残念に思った。そし
て、

もし妹を保護出来ていたなら、もう一度笑顔が見れたかもしれない、
と

とても残念に思った。

第9話（後書き）

宴では精霊を登場させるつもりです。

レティシアの力の片鱗を見せるつもりなので、乞うご期待！！

第10話（前書き）

あんまり期待したほど話が進まない・・・（汗

第10話

側室や貴族達が集まった大広間にて、私の機嫌はすこぶる悪かった。

17人目の側室として皇帝の横に座り、人々の視線を集めていることも。

一段下にずらりと座った16人の側室達の憎悪の視線を受けることも。

貴族達の好奇の視線に晒されることも。

そしてなにより、妹を保護することが叶わなかったことが、私の機嫌を底辺にまで下げていた。

「レティシア・リ・デ・エンフェライエル様へ、ぜひご祝福の言葉を……」

いつまで貴族の挨拶が続くのか。ほとほと辟易している。

『何て無意味。時間の無駄。私には何の特にもならない。妹に会いたい。』

私の頭にはこれしかなかった。

きっと妹は精霊が保護している。それは分かっている。他ならぬ私が、精霊に頼んだのだから。

でもだからこそ、きっとこのままでは一生ガルシアの騎士には見つからないだろう。

きっと精霊は、私がガルシア皇帝と契約を交わしたことを知らない。だからガルシアの者達から逃げるのだ。妹を害するものとして。

『私が探すしかない。』

それが、私が出した結論だ。

または、精霊と話が出来よう、この王宮の結界の外に出られるだけでも良い。

精霊を呼べれば、すぐに解決するだろう。

なのに・・・

と、レティシアは隣に座るカイルに目を向ける。

先ほどその案は他ならぬガルシア皇帝であるカイルに却下されていた。

そして、そのカイルを説き伏せる術を、レティシアは持っていなかった。

『逃げると思われている？』

契約を交わしているのに？

『人に頼るのが嫌いとか？』

皇帝として命令はするのに？

『力がないと思われてる？』

月光の民なのに？

『そもそも私のことが嫌いだから・・・とか？』

これが一番ありそう。

とにかく、早く妹を保護して欲しい！！

居場所が知れないことが一番嫌だ！！

そう叫べたらどんなに良いか・・・。

実際は皇帝の隣に黙って座っているしかない。

何て無力。

レティシアは唇を噛み、震える手を膝の上で強く握り、怒りを抑え

るしかなかった。

宴は進み、側室達による『出し物』の時間になっていた。

『出し物』とはレティシアが勝手にそう思っているだけで、実際には彼女達は皇帝と第17妃であるレティシアへのお祝いと称して歌や踊りを披露しているのである。

だがそれは『称している』だけであって、誰がどう見ても皇帝の気を引こうと自らの得意なことを披露しているにすぎなかった。

もつとも、他の事で頭がいっぱいのレティシアには、皇帝に向けられる熱の籠ったまなざしも、自身に注がれる憎悪のまなざしも、イライラが募るだけで大したダメージを与えはしなかったが……。

だがそんな宴は、最後の側室の出し物が終わったことで、緩やかに終了に向けて進もうとしていた。

「エンフェライエル妃にも何か得意なものをお見せいただきたいですわ。」

この言葉がなければ。

発したのは第1妃『イゾルデ・リ・デ・イルマーレン』
王妃に一番近いと言われている側室だった。

第10話（後書き）

ちなみに、レティシアの正式名「レティシア・リ・デ・エンフェライエル」は

『リ』＝側室

『デ』＝公爵

『エンフェライエル』＝家名

です。

なので、『リ』を抜かすとエンフェライエル公爵令嬢ってことです。

エリアの『ル・フラレン』は『ル』＝子爵でフラレン子爵令嬢です。

ルルとリリの『ラ・ベル』も『ラ』＝男爵でベル男爵令嬢。

のちのち増えていきます。

第11話（前書き）

おまたせしました！長いと見せかけて文字数はそんなに多くないかも！！みたいな・・・。

楽しんでいただければ嬉しいです！

第11話

居並ぶ精霊たちの真ん中で優雅に微笑む娘は

月の銀色の光を受けて、髪も瞳も銀色に見えた

まるで、純血の月光の民のように・・・

レティシアの機嫌が悪い事は、もちろん分かっていた。他ならぬ自分がその機嫌を損ねたことも分かっている。

そもそも、契約である「妹の保護」が叶っていないのである。レティシアの機嫌が悪いのは当たり前で、さらに「自分で探す」というレティシアの主張を自分が却下したことで、さらに機嫌を損ねてしまった。

彼女の妹を保護しなければならないことは分かっている。自分が言い出したことだし、何しろ契約書にも書いてあることだ、反故にはできない。

でも・・・

「彼女の中には妹のことしかないのか」
とそう思ってしまったのだ。

妹のことを思っているからこそその契約だったのに、いつのまにか妹のことを思っているレティシアが気に入らないなんて、自分は何を考えているのか……。

妹を見つけるのは良い、あの笑顔がまた見れるかもしれない。でもそれは自分に向けた笑顔ではない、それが気に入らない。

そもそも彼女は、夫である自分のことは何とも思っていないのか？ 少しくらい関心を持ってもバチは当たらないと思うのだが……。

……思考がずれたが、とにかく

「妹を見つけてやりたい」と思う自分と

「妹を見つけない」と思う自分

その矛盾に挟まれて、その時カイルは気付かなかった。

どちらもレティシアを想っているがゆえの想いだということに……。

側室達のいつもの『お遊戯会』を見ながら、隣のレティシアを窺えば、宴の始めより機嫌が悪そうだった。まあ、宴自体はまだしも、側室達の『お遊戯会』はレティシアにはさぞ無意味に、そしてつまらないものであろう。彼女達にはレティシアは見えていない、皇帝である自分が獲物だからだ。地位、権力、財産、どれも最高の自分は彼女達にはさぞいい獲物だろう。もっとも、狩られてやるつもりは毛頭ないが、この『お遊戯会』は早く終わりにして欲しい。毎度

毎度ご苦勞なことだ。

と、お決まりの『お遊戯会』にうんざりして側室達の視線の半分が何処を向いていたのか気付かなかったのが間違っていたのか。

はたまた『早くお開きにしてレティシアと話し合わなければ』と、この後のレティシアとの事に考えがいつていたのが悪かったのか。

気が付いたら第一妃のイゾルデがレティシアに喧嘩を売っていた。

「月の民の魔法でも見せていただけませんか？」

「さぞ大きな魔法を使えるのでしょうか？」

「まあ、純血の月の民には負けるのでしょうか？」

「踊りや歌は出来ないでしょうから、やはり魔法を見せていただきたいものですわ」

「でも、純血ではないのなら魔法も大したことないのではなくて？」

イゾルデに便乗して側室達が騒ぎ始める。

うんざりしながらも騒ぎを鎮めようとしたときだった。

椅子が耳障りな音を立てた。隣に座っていたレティシアが勢い良く

立ったのだ。

下から見上げる形になったカイルにはレティシアの表情は良く見えなかったが、先ほどまで感じていた怒りの感情が消えていることは感じ取れた。そしてレティシアは無表情に言っただ。

「ならば魔法をご覧に入れます。」

と。そしてそのまま2、3歩歩く。

誰もが息を呑んだ。イゾルデも、まさか本当にこの場で魔法を使うとは思わなかったのか目を丸くしている。彼女自身も相当な魔力を持つてゐるため、月の民とはいえ純血ではないレティシアはたいしたことはないと思っていたのか、馬鹿にしたかっただけのようだった。・少なくともカイルにはそう見えた。イゾルデにやっていた視線を表情の見えないレティシアの背中に戻し、止めようとした瞬間だった。

『あま
天つ空翔る君
かけ』

澄んだ謳声うたごえが響いた。

『あま
天つ空翔る君
かけ』

優しき揺りかごより請い願う

穏やかな風にこの想いを乗せ

荒れる風にこの願いを乗せ

どこまでも遠くへこの声に乗せる

我の声聞こえたならば馳せ参じ

我の願いを叶えたまえ

自由を司る風の精霊の王よ

我の真名は『二つの月』

どうか願いを叶^{かな}えたまえ」

謳声に合わせ、レティシアが舞う。魔力をその身に纏わせながら。

魔力は風の属性を持ち、銀色に光る。

広間の天井はすべてガラス張りになっていて夜空が良く見えるよう

になっているため、目視できるほどに強大な魔力は、月光を受けさらに輝いて見えた。

キラキラと輝く銀色の魔力が、レティシアのドレスを揺らすのが、まるで風にそよぐ赤い薔薇の花びらの様だ。

やがて、1人また1人と半透明な羽を持った大小様々な人間に似た者たちが集まり始めた。

それは、初めて見る精霊たちの姿だった。

赤、黄、青、緑、さまざまな色を持つ彼らが何の精霊か、初めて見るカイル達広間にいる者には分からない。だが、皆一様に笑っていた。謳い、舞いながら、いつまにか広間の中央に居たレティシアを中心に輪のようになり、思い思いに舞っている。

そして、レティシアも笑っていた。

レティシアが謳い終わった瞬間、何処からともなく突風が吹いた。

精霊たちが頭を下げ左右に一列になり、レティシアへの道をあける。

その道を、1人の青年がゆったりとした足取りで歩いてくる。

銀色の髪が、月光を受け蒼^{あお}く輝く。ゆったりとした服は空色で統一されていた。

春のあたたかい日の空を思わせる、淡い空色の瞳が優しく細められる。

一目で人間ではないと分かるほど、それほどの美貌の青年だった。

いまだに広間の人間は呆然としている。

今目の前に居るのが、精霊王に次ぐ力を持つといわれる7大精霊の王の一人、風の精霊達の王であることに気付かぬまま。

第11話（後書き）

行き当たりばったりで書いているので次が思いつきません（汗）

でも書かないで居ると何を書いていたか忘れるので、忘れないうちに次話に取り掛かろうと想います！！

次は今回登場した風の精霊の王様のターン！かな？

第12話（前書き）

カイルが出てこない・・・。

今回は風の君のターン！！だから！

第12話

銀色の髪を煌かせ、ゆったりと歩いてきた人物、いや、精霊は、レティシアを見つめて微笑んだ。

そして、レティシアもそれに答えるように微笑んだ。

「僕の月。久しぶりだね。何でずっと呼んでくれなかったの？」

『風の精霊の王』が言った。顔は笑顔だが声には少しの不満が滲んでいる。どうやら少し拗ねているようだ。

「ごめんなさいシエル。でも、王たるあなたをそんなに頻繁に呼ぶわけにもいかないわ。」

「つれないね。昔はいつも呼んでくれたのに。僕だけじゃなく、みんなそこだけは一致しているんだよ。幼い頃の君のほうが素直だったし、ずいぶん甘えてくれて、そこが可愛かったのに。」

その言葉を聞いて、今度はレティシアが眉を顰め拗ねた顔をした。だが『風の精霊の王』シエルはレティシアとは逆にとても嬉しそうに笑った。

「もちろん、今も君は可愛いよ。僕の月。ところで、今日は何かあったのかな？他の人間が居る前で僕を呼ぶなんて。まあ誰が居よう

と僕は気にしないけど。君は気にしていただろう?」

そう、人前でレティシアは精霊を呼んだことはほとんどなかった。今はレティシア自身の強大な魔力を放出しているため、レティシア以外にも精霊達が見えているが、もともと他の人間達に精霊は見えない。レティシアが一人で喋っているように見えるだけだ。月光の民ということをして町に住んでいたときも変な目で見られた。人々は精霊たちがいくら身近にしようと気付かない。「人に気付いてもらえない」それだけで、精霊たちは傷ついているというのに・・・。

レティシアにとって精霊は友達であり家族だ。だが多くの人は精霊の存在を近くに感じなくなり、居ないものだと思込み、精霊を信じる者を馬鹿にする者までいる。そんな者たちに親切に精霊達を会わせる訳がないし、精霊たちとの大切な時間を邪魔されたくない、そうレティシアは思っていた。だから精霊と人前で話したりなどしないし、呼んだりもしない。

「本当は、こんなところで呼ぶつもりじゃなかった。でも、隠れて呼んでもシエルの魔力は大きくて、この王城の結界を、誰にも気付

かれずに通るなんて無理でしょう？私は陛下に妹を探すのを止められた。だから私は動けない。だから、シエルに頼みたいの。」

「誰にも気付かれずに通るのが無理だからって、こんなに大勢の前で紹介してくれるなんて……。そんなに焦ってたの？周りを気にする余裕がないほど。」

そのシエルの言葉に、レティシアの顔が歪んだ。悲しみと苦しみを混ぜ合わせたような、今にも泣きそうな顔。その表情を見て、シエルは苦笑しながらレティシアを抱きしめた。

「君は周りを気にしすぎなんだよ。もつと皇帝や周りのものなんて気にしないで、思う通りにすればいいのに。でもそうだね、君が背負うものは大きすぎる。それを支えるのは僕たち精霊には難しいのかもしれない。でもね、僕の月。それでも僕たちは、少しでも君の役に立ちたいんだ。君のことが好きだから。だから、『頼みたい』

じゃなくて昔みたいに言ってごらん？」

「……………」

「昔は、可愛くおねだりしてくれたじゃないか。」

それでもしばらく、レティシアは沈黙を貫いていた。本来なら、『風の精霊の王』たるシエルに何の見返りもなく『おねだり』なんて出来る立場ではないのかもしれない、でも、今は……。

「お願い、^{シエルデイン}天つ空。私の光を探して。居場所を教えて。まだ近くにいるうちに。早く・・・早く会いたいのに。」

レティシアの顔が泣きそうに歪む。それは、ずっと願っていたことだった。会わなくなって何十年と経つわけではない、でも、会いたい。

この広間に現れてから笑みを崩さなかったシエルが目を見開いて驚いた顔をした。

「そう、そんなに会いたかったんだね……。それにしても、本当に君はおねだり上手だね。僕の真名を呼んでくれたのはいつ振りだろう？」

そう言ったシエルは、頬を紅潮させ、嬉しそうに笑った。一度レティシアを強く抱きしめてから体を離れたシエルはレティシアを見つめる。

「本当はおねだりなんてしなくても願いは何だって叶えてあげるけど、やっぱりおねだりされたほうが良いよね。あとでみんなに自慢することにするよ。さて、じゃあ君の妹を探そうかな。きっと誰か他の精霊が隠してるんだと思うけど、僕たち風の精霊は騙せないからね。」

そう言ってシエルはおもむろに誰も居ない空間へと声を掛けた。

「聞いていただろう？ 僕の月のお願い事だよ。我が眷属の名に懸けて、月の妹君を探しておいで。」

その瞬間、暴風が吹いた。呆然としたままだった広間の者達は突然の暴風にドレスや髪を抑えたりと忙しい。目も開けられぬほどの暴風が吹いた後、広間の者達が目を開くと、そこに居たのはレティシア一人だった。何がなんだか分からぬまま、広間の者達は再び呆然とするしかなかった。

第12話（後書き）

今回はカイル視点で書こうかと思っています。
今回全然描写がなかったので・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694u/>

月の娘、太陽の王妃

2011年10月29日00時04分発行